

日經つてから死んでしまいました。所がまた一羽の鳥が、同艦へ来て止つたから、また翼を射つてこれを捕え、毎日牛肉を喰はせて飼つてあるそうです。

今後まだ、戦争が續くから、色々な動物が、日本軍の方に来るでしょう。或は黒鳩將軍が捕えられるかも知れませんが、そしたら頗る愉快ですな。序にいひますが、日露戦争があつてから、出征軍人の留守見舞の進物に、張子の虎が大部流行るそうです。これは「虎は千里の籔を越えて、再び千里の路を歸る」とか、或は「虎は死して皮をとどめ、人は死して名を残す」とかいふ意義でありましょう。

(おはり)

不思議な物語

太田龍東譯

一寸一言

世の中に、面白いお話も随分澤山ないではありませんが、この物語ほど面白くて不思議なお話はないだらうと思ひます。不錯すると皆さんは、斯様に思はれるでありませう、彼歴龍東が、なにそんな面白い緯を考へ出すものかと。いかにも、御尤も千萬なことで、龍東のやうなものがいくら考へたとて、怎碌なことを思ひつから筈は、いけません。

那歴にしても、なにか面白い緯の書いてある本でもあつたなら、せめて真似なりと爲して見ようと思ひまして、いろ／＼探した所が一つあつたのです。それは、西洋の本で、中には不思議なこと

ばかり書いてある、ごく面白い本であります。そこで龍東は、その中で皆さんに面白さうな枝を一本貰ひ受けまして、この雑誌へ譯換へたなら、さぞ美しい花が咲いて、みなさんに持て囃されるであらうと思ひましたので、こゝに譯ることにしました。皆さん、什麼か可愛つて見てやつて下さい、實に奇妙な花いやお話ですよ。

第一、漁夫の正太郎

こゝに、一人の老とつた漁夫がおりまして、その妻と三人の子と自分とを合せて五人が、家貧しくその日を送つてゐました。この漁夫の名を正太郎と云ひまして、雨が降つても風が吹いても、毎日朝から晩まで濱邊に立て魚を漁つてゐましたが一つ不思議なことは、獲物の有るなしに拘はらず、一日に四度の外は網を下さないのです。

ある日のこと、まだ朝日の昇らない時分から網を荷つて濱邊に出で、魚のゐさうな所へ一網颯と下せしに、何か入つたと見へ手堪がするから喜んで手元へ引寄せて見ると、筒はそも什麼に、魚ではなくて大きな馬の死骸でありました。漁夫は腹立ちて何やら呟きながら、二番目の網を卸しますと、又手堪がありますから、こんどこそ魚であらうと打ち喜びつゝ、急いで揚げて見ると、矢張魚ではなく巨大な古籠の破れたのでした。漁夫は一度ならず二度までも忌はしい物ばかり掛つて雑魚一尾もとれないから、嘆息して、我は何故こんなに運が悪いのであらふ。こんなに朝早くから濱邊に来るのも、妻や子を養ふが爲めであるのに、神様は何を悪んで救つて下さらないのか。我は、他に金をもうける道を知らないから、魚が捕れない

いときは、妻や子は飢へて死ぬより他はない、さても無慈悲な神様の仕方ではないかと、且つは怨み且つは啣ち、悲しい聲を上げて叫びました。叫んで見たが何んとも仕方がないので、また三度目の綱を卸しましたが全じく魚は入らないで石や泥などでありましたから、漁夫は大に打嘆き遂にはそこに倒れてしまいました。

さうこうする中に、太陽の光りはキラ／＼と夜が明渡りましたから、漁夫は海水で口を嗽ぎ神を拜して、こん度は最後の四番目の綱を颯つと卸しました。こんどはと思つて陸地に引揚げて見ると、又魚ではなく銅作りの一つの壺であつたのです。かやと思つて手に取つてよく見ると、壺の口には嚴重に密封がしてあつて其上に刻印がしてあります、中には何があるか分らないが、之れを鑄物師

に賣つたなら少しの金を得て、今日魚の捕れなかつた代りになるだらふと喜びつゝ、壺の四方を打詠めてみました。さうして心の中に考へますには、こんなに嚴重に密封がしてあることを思へば、決度中には大切な寶物があるに相違ない、寶物があるとすれば早く中を檢めて見やうと思ひまして、衣囊の中から小刀を出して、密封を切り口を倒様にして振りました。けれど何も出ないから怪しみながら見詰て居ますと、あら不思議、忽ち壺中から變なものが出だしました。漁夫は何が出るかと瞳を定めて見てみますと、一道の黒煙が次第立ち昇りて雲に近づき、四方は看る／＼海岸一面煙に蔽はれて眞暗となりました。漁夫は、餘りのことに膽もつぶれ、只呆れて夢に夢見ると心地して言語も出です、慄き居るばかりであります。皆さん、

この壺の中からどんなものが出るでせう。

第二、壺の中の怪物

漁夫は慄きながら見てゐますと、海岸一面に擴つた煙は集つて一となり、こんどは、それが三丈餘りもある世にも恐ろしき怪物となりました。この黒山のやうな怪物を見ていよく恐ろしくなり逃げ去らうとしました。足は痿へ腰はしびれて一歩も進むことは出来ません。このとき怪物は、天地も碎けるばかりの大聲を發して曰く
『汝は無慈悲なる人間であるから、この場ですぐ殺してやる。』

漁夫は、これを聞いてビリ／＼震ひながら、
『私は、今御身を壺の中から出して、自由の身としてあげたのに、なぜ無慈悲でありますか、又なぜ私を殺すのですか。』

と尋ねますと、怪物の云ふのは、

『我は、汝に自由の身としてもらつたから恩があるが、又汝を殺さなければならぬ事情もある。いま、その事情を語るからよく聞け。』

漁夫を睥睨して、次のやうなことを語りました。
『今から數百年前のこと、この世の中に二人の鬼神の大將があつた。一人は我で、他の一人は鬼山といふ鬼神であつた。ところが、この鬼山と云ふ奴は、我があると何にかに就いて邪魔になるから、どうかして殺さうと考へてゐた。あるときのこと、我一人寝てゐると、鬼山が澤山の鬼神を連れて来て、遂に銅壺の中に禁錮めて嚴重に刻印をし、海の中に投げ入れたのである。我がこの時の嗟嘆は如何ばかりであつたであらふ。』

こゝまで語つて鬼神は、釜のやうな大きな眼から、

ポンプから水の出る如く涙を流して泣き、いかに
も残念さうにしてゐたが、又、言語を出して話し
かけました。

『我は海底に沈められて心の内にこんな誓を立て
たのである。この後百年の内に我をこの壺中から
救ひ出してくれるものがあつたら、その人一生は、
どんな望みでも思ふ通りにさして、富貴安樂にこ
の世を終らせやらふと思つた。それなのに、第一
期の百年は已に過ぎ去つたが、誰も我の命を救つ
て呉るものがない。

それで我は又誓を立てた。今から、百年間に我
を自由の身としたものがあつたら、その恩に報ゆ
るため、この世の中にある凡ての富貴安樂のこと
は、皆その人に與へてやると。誰か救つてくれる
人があるかと毎日待つてゐてもない。さうこうす

る中に、第二期の百年も又過ぎてしまつた、仕方
がないから、更に又誓を立てた、今から、百年の
間に、我を救つてくれるものがあつたら、その人
をある強い國の王様にして、平常その身を守つて
やつて、毎日三度つゝ、何んでも願ふことは遂げ
さしてやると思つた。こんなにして、毎日待つてど
暮せど救けてくれる人もなく、又もや百年の第三
期は過ぎた。

こうなつては我も耐忍できず、多年の不平は一
時に出て、こんどは、こんな誓を立てた。この後、
何時でも我をこの壺中から救ひ出すものがあつた
ら、誰でもすぐ殺して終ふと云ふことを。しかし、
その人を殺す方法は、救けられた恩義によつて、
刃で殺すか、撲り殺すか、水火に投じて殺すかは、
その人の云ふ通りにしてやることに定めた。我れ

がこの誓を立てたのは空しからず、始めてその思はかなつて、今汝の爲めに救けられたのである。

救けられた恩義は知つてゐるが、我は誓を立てた上は之れを破ることは出来ない。それだから、只その殺す方法は汝の望みに任かす。』

この不思議な怪神の長物語を聞く毎に、漁夫は呆れ惑つてゐたが、聲を出して、

『私は、三百年も海の底に沈んでゐた御身を、救ひ出して喜ばれる筈の所、却つて殺されなければならぬとは、餘り道理にかなはぬことであります。どうか今一度思ひ直して、その不正な誓を破つて下さい。』

と拜むやうに頼みますと、怪神は、

『いや、この誓は、我の百年この方立てたことであるから、汝の云ふことは、いかに道理でも、

之れを破ることは決して出来ない、只、汝に死ぬる方法を選ばしむるばかりである。』

と云つて、少しも聞きいれる風はありません。この時、漁夫は、

『私が、今こゝで命を取られるのは、何にかの因果だと諦めるが、後には、妻や子もあるから、可愛想だと思つて一命をお助け下さい。』

怪神は、怒れる聲を張りあげて、漁夫を礮と疾視つゝ、

『汝が何程頼んでも殺さずにはおけない、彼は云ふと、一層無惨なる殺し方をするぞ。』

漁夫は、いくら頼んでも仕方がないと思つたから、他に一の工夫を出して、怪神に對ひ、

『私の命は救けて貰へなければ仕方がないと諦めます。しかし、私は一つ疑はしいことがあります。

それは、御身がこの壺中に在つたと云ふのはどうしても信ずることが出来ない」と云ふことであります。もし、これが虚だとすれば、私は虚飾の爲めに一命を捨ねばなりません、願くば、眞實であると云ふことを知らせて下さい。」

と云ひますと、怪神答へて、
『我は虚を云ふものではない、之れを疑ふならば、天地の神に誓つて證明して見せう。』

と云つゝ、天地を拜して誓約を立てました。

漁夫は、早や仕済したりと喜び、

『天地の神に誓を立てた止は眞實であります、が、考へて見ると、御身のやうな大きな身体が、この細少な壺中に這入ふとは思はれません。百聞は一見に如かずと云ふことがあるから、この壺中に一度這入つて見て下さい。』

と云ひますと、怪神は冷笑ひながら、

『汝の云ふやうに、凡人の眼から見たら不思議であらふ、それでは、これから壺中に這入つて疑を晴らさしてやらふ。』

云ふが早い、天地を睥睨て咒文を唱ふると、不思議や怪神の形は、足からだん／＼頭まで煙の如く霧の如く消えて、丁度前の黒雲となりました。

その黒雲は、一道の煙に集つて、壺の中へ這入ると、天も晴渡りよい日和となつた。このとき、壺の中から漁夫に云ふのには、

『彼の疑ひ深き男よ、我は完くこの壺中に這入つたのである、これで汝の疑は晴れたであらふ。返事を爲ないかどうだ／＼。』

漁夫は聞えない爲して、側にある前の鉛板の蓋を取つて壺の口に當て、元の如く確と封じて、大き

な聲で打ち笑ひ、

『こりや、怪神ッ。汝のやうな無慈悲な奴は生かしてはおけない、元の如く壺中に入れて火の中に投じてやるから覺悟せ。』

と云ひますと、怪神は、壺中から悲しげな聲で、『前に汝を殺すと云つたの皆虚言だから、どうかこゝを出して下さい頼みます。』

と云ひますと、漁夫は、さも氣持好さうに、『怪神よ、汝は、神通力を有する怪神の大將ではないか、今、人間一人の爲めにどうすることも出来ないとは、さてもく意氣地なしでないか。また、前に言つたのは虚言だなど、はよくも云へたものだね、そんな口車には乗らないよ、汝は、この壺の中で死ぬるのが天命だから、壺中で往生するがよろ。』

と云ひますと、怪神は、また悲しげな聲で、

『壺を開いて我を自由の身として來れたなら、汝が望みは善惡に係はらず、何んでも満足と與へてやるから、どうか早く出して下さい。』

と頼みます。漁夫は、なかく承知せず、

『前きに汝を出して大そう困つたから、こんどは出さないよ。もし出したら、また、この身は今の汝のやうなことになるのは知れてゐる。汝を今出して自由の身としてやるのは、丁度、希臘王が、醫師のドウバンに救けられて、又、これを殺すのと全じやうなことになるのは、鏡にかけて見るやうだ。今汝の爲めに、希臘王と醫師との面白い談話をして聞かすからよく聞けよ。』

と云つて、漁夫は話しかけました。皆さん、この漁夫はこれから、どんな面白い話をするでせう。次號を樂んで待つてゐなさい。